

あるくは、きぶとくじんじゆ

「いまずぐ結果が出ること」ばかりを追い求める時代の風潮に「路地裏」や「喫茶店」という視点を対置すると、新たに覚えてくるものがある。路地裏や喫茶店から平川克美さんが体験的に得た学びとは？そして、学びの本質とは——？

実業家・文筆家

平川克美

●ひらかわ・かつみ 1950年東京都生まれ。株式会社リナックスカフェ代表取締役社長。株式会社ラジオデイズ代表取締役。立教大学特任教授。隣町珈琲店主。『路地裏人生論』（朝日新聞出版、写真・高原秀）、『路地裏の資本主義』（角川SSC新書）など著作多数。

なぜいま「路地裏」なのか

少子高齢化や人口減少が進む日本では、経済を担う働き手がどうしても減るわけで、今後は過去にあったような右肩上がりの経済成長は期待できない——。我々はいままさに、そういう時代を生きているのではないかと思います。

そのようななかで、人々が生き抜くための一つの方法として、かつてあった「路地裏の駄菓子屋」がモデルになるのではないかと。そんな発想から生まれたのが、『路地裏の資本主義』や『路地裏人生論』であり、日刊ゲンダイで連載した「路地裏の読書術」という書評です。

そのようななかで、人々が生き抜く地域共同体、あるいは中間共同体的なかに必要なものとしてあり続けたそれが、一昔前まではよく見かけた路地裏の駄菓子屋であり、小さな儲けでやっていけるという点では、定常経済の象徴的な存在だったのかもしれません。

ところが核家族化や格差社会の広がりによって、さまざまに共同

体が壊れていくのと同時に、駄菓子屋や、似たような小商いの商売も、徐々に姿を消していった。

これ以上、共同体が破壊されては、暮らしそのものが危ぶまれますから、新たな中間共同体を作っていく必要があるとは思いますが、政府が掲げるのはいまだに右肩上がりの経済に固執した成長戦略ばかりです。現状を考えれば、成長しなくてもやっていける定常経済こそ目指さなければならぬはずで、僕自身、政治家にそういう話をする機会が何度かあったんですけど、なかなか芳しい答えは返ってこない。そういう考え方に対する共感はあるけれども、具体的な施策は出てこないのです。

それならもう、自分でやるしかない。かといって、駄菓子屋がそこいらにあった時代に逆戻りはできません

から、それならまあ、やれる人から何かしらのコミュニティを作っていくのはいいんじゃないかと。そこで始めたのが、本業のかたわら始めた「隣町珈琲」という喫茶店でした。

いざ自分でやってみると、これがなかなか苦しいんですけどね（笑）。もともと稼ぐつもりはなく、僕や仲間が集まって寛げる場所であること自体が大切だとは思っていたんですけど、うちでは一杯五百円のコーヒーが一日二十杯出る程度。この売り上げでは、普通は店主が暮らしていくのさえギリギリで、従業員を雇うのは相当厳しい。生活のかかった場合に、喫茶店経営がどんなに大変かが、身にしみてわかりました。

それは、本当に学問なのか？

路地裏は、ある種の境界線として

機能しながらも、隣近所の共有地みたいなところがあって、家の中でもあり外ともいえる縁側に似たところがある。中と外をつなぐ、際、という意味では、都市とその周縁をつなぐものであり、現在と過去をつなぐものでもあるように思います。

そんな性格を持つ路地裏からは、実に多様な人間の営みが垣間見えます。都市の、最先端のものが集まるキラキラした場所だけで世界を眺めているのは、流行は見えても、見えていないのは実はそこだけ、ということになりかねません。

僕は大学でMBAを教えているのですが、通常、MBAの教授には、企業経営の経験がある会社役員や、経営コンサルタントが迎ええられることが多いんです。そういう人々は往々にして、ある個別の会社の戦略や方法論しか知らず、四半期で決算